

かたりべ145

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより

特別展文学コラム③

文学から読むとしま90年

区制九〇周年特別展「豊島大博覧会」では、展示室の各所に作家などの言葉があることにお気づきでしょうか。文学分野と美術分野でそれぞれの作家の文章から、その時代の豊島区の雰囲気伝わる箇所を選び、壁に装飾しました。

また、今回の展覧会を象徴する言葉として、入り口付近には福沢諭吉の言葉を引用しました。

博物館 世界ノ一切ノ物ヲ集メテ見セ物ニスル所ヲ云フ
博覧会 世界ノ一切ノ物ヲ持寄り各國諸人ニ示シメセシムル會也

〔福沢諭吉「増補 西洋事情」巻之一、林芳兵衛、一八六八年〕

私たちはこれを「切り文字」と呼んでいます。ほかの博物館や美術館でもこの展示の仕方をご覧になったことがある方もいらっしゃるかもしれません。一文字ずつ切ったシール状の文字を壁に貼っています。本展示のすべての文字数を足し合わせると膨大な数になります。

①～⑧の画像は、文学分野で選んだ文章です。これらを四つのキーワードで振り分け、解説していきます。

切り文字は上の方にあるものも多く、少々首がお辛いかもしれません。またご覧になっていない方はぜひ、文章とその周辺に展示されている資料とをあわせてご覧いただけましたら幸いです。〔N〕(2頁へつづく)

① 麦ばたの垂り穂のうへに
かけ見えて
電車過ぎゆく池袋村

香山秋水「きさびしき樹木」
南光書院、一九一八年

② 池袋駅なんてものは
廢駅といつてもいい位の
みずばらしいもので、
お隣の大塚目白などの
にぎやかな街に比べると
まるで田舎駅だった。

『探偵小説四十年』講談社、一九七九年四月

③ この空襲で池袋駅をへだてた向う側の
雑司ヶ谷町五丁目町会長をやっていた
大下宇陀児君の家は全焼してしまつた。
翌日立教大学の配給所へ、
大下君がすすめた顔でやってきたので、
はじめてそれがわかつた。

江戸川乱歩「空襲日記」
『探偵小説四十年』講談社、一九六八年

④ 私らは防衛指導員だつた関係上、
白石七郎の遊戯に、そういう装置(※)の
町会員に見学させたりしたものである。
まだ食けいなくさなど、夢にも考えていないころであつた。

※軍需などで部屋の中につくった面
江戸川乱歩「町会副会長と」
『探偵小説四十年』桃源社、一九六一年

⑤ 池袋の演劇的土壤は、
地味ではあるが、池袋の演劇的土壤は、
意外に豊かで根が深い。(略)

池袋が、ブロードウェイのような「演劇の街」となる日も近いのではなからうか。

三浦大四郎「演劇の街・池袋」
『わたしの豊島紀行』一九五五年七月

⑥ 映画館が、駅の東西で二十館に
近いだろう。歩く度に、ビルやアパートや
商店の新築、改装が目立つ。
国鉄の駅の平日乗降客が、とどろきの
大塚や目白だと五万六千だが、
池袋は三十万を越している。

大下宇陀児「池袋紀行」
西条七郎監修「池袋紀行」
一九五五年二月十五日

⑦ 夕日がサンシャインの向こうに斜めに横切り、
右側に落ちると地平線がオレンジ色に染まる。
灰色から紫、黒へと変化するサンシャインの
建物の窓に電燈がついて、細かな白色の楕円が
並ぶさまは人工美の極と言つていいだろう。

池袋妻夫「サンシャイン90」
『わたしの豊島紀行』一九九〇年九月

つづき 文学から読むとしま90年

■昔の風景 ①②

現在の豊島区は、高い建物がひしめき合い、多くの人々が行き交う賑やかな街ですが、かつてはまったく違う姿を見せていました。歌人の若山牧水は、麦畑が広がる牧歌的な風景の中、影を落としながら電車が走ってゆく「池袋村」の風景を歌に詠みました。

池袋駅ができたのは一九〇三（明治三六）年のことですが、当時この辺りは畑や牧場が広がる農村地域でした。一九二三（大正一二）年の関東大震災を機に多くの人々が流入し、都市化が一気に進むまでは、この歌のようなのどかな風景が広がっていました。

大正期から空襲で自宅が焼失してしまいうまで、三〇年近く巣鴨に暮らした童画家の武井武雄は、当時の池袋駅のことを「みすぼらし」く、隣の大家や目白と比べると「まるで田舎駅だった」と書いています。牧水の歌や武井の文章に登場する池袋は、現在の姿とはあまりにもかけ離れていて、想像するのも難しいかもしれません。今回の展示では、当時の池袋駅の様子を描いた絵画作品や、写真資料

なども展示していますので、ぜひ現在の風景と比較してみてください。[S]

■戦争 ③④⑤

日中戦争が始まり戦争の時代へと突入すると、その影響は作家たちの間にも広がっていきました。豊島区が誕生してすぐの一九三四（昭和九）年から三〇年以上暮らした探偵小説家の江戸川乱歩と大下宇陀児は、それぞれ池袋丸山町会副会長、雑司ヶ谷五丁目町会長に任命されました。

防空指導員でもあった乱歩は、町会員に筆筒などで作った爆風をよけるための囲いの見本を作って見せたといわれています。それと同じものが、戦中・戦後の区民のくらしコーナーの「防空絵とき」の映像の中でも紹介されています。

一九四九年に池袋へ引っ越してきた推理小説家の飛鳥高の家は、なんと偶然にも江戸川乱歩邸の隣でした。⑤の文章は、飛鳥が引っ越して来た日を回想して書いたものです。その頃はまだ、「犯罪の場」で雑誌『寶石』の懸賞小説に入選したきり、あまり作品を発表していませんでした。隣人となった乱歩の「もつと書くように」という激励もあり、本業のかわら、本格的に作家としての道も歩み始めることとなりました。[N]

■演劇・映画 ⑥⑦

池袋の劇場といえば、どこを思い浮かべますか。一九九〇（平成二）年に完成した東京芸術劇場や、二〇一九（令和元）年に新たに誕生した区立芸術文化劇場が有名でしょうか。

文芸坐の社長も務めた三浦大四郎の⑥の文章は、「東口には、私の劇場をはじめ、シアター・グリーン、パモス青芸館、SCOTアトリエ、サンライズ・ホール、西武百貨店スタジオ200があり、西口には池袋小劇場がある。サンシャイン劇場もある」という文章からはじまります。すでに閉館してしまった劇場も多いですが、現在も区内の劇場を舞台に「池袋演劇祭」が開かれるなど、「意外に豊かで根が深い」池袋の「演劇的土壌」は今も脈々と受け継がれています。

また戦後すぐの最大の娯楽といえば、映画でした。戦前に大塚・巣鴨を中心にあった映画館は空襲で焼失し、戦後その中心は池袋駅周辺へと移りました。②の武井武雄の文章と⑦を比べると、一九五五年頃には、池袋の賑わいが大塚や目白を圧倒していることがわかります。

当時の映画館は、娯楽が少なかった頃の、楽しみが詰まった場所でもありました。[N]

■現在の風景 ⑧

池袋のランドマークとして、二四〇メートルもの高さを誇るサンシャイン60は、一九七八（昭和五三）年に完成しました。この場所にはかつて、戦後米軍が接収し、巣鴨プリズンとして機能した東京拘置所（巣鴨刑務所）がありました。

一九七三年に着工したサンシャインシティは、五年に渡り工事が続けられまして、区内各所から見ることができたといえます。長く大塚に暮らした推理小説家の泡坂妻夫も、このビルが建っていく様子を毎日自宅のベランダから見っていました。

近代的な長方形のビルは、ともすればコンクリートジャングルの一部として、あまり良いイメージで語られることの少ないモチーフですが、泡坂の文章のなかでは「人工美の極」と称されています。戦後を重く引きずった場所から、都心の空に高くそびえる近代的なビルへと変貌をとげたこの場所そのものが、戦後復興という明るい未来を象徴していたのかもしれない。[S]

（文学・マンガ 西方ゆり恵 [N]・佐伯百々子 [S]）

豊島区を走る都電

2

一四四号に引き続き、第三章の「豊島区を走る都電」の展示内容について紹介していきます。

池袋駅

世界的な乗降者数を誇る池袋駅も、日本鉄道の駅として設置された一九〇三(明治三六)年当時は、二本のホームを持つ小さな駅でした。一九二三(大正二)年に現在の東武東上線となる東上鉄道、一九一五(大正四)年に現在の西武池袋線となる武蔵野鉄道が接続され、駅の大規模化が進むこととなります。一九四五(昭和二〇)年の城北大空襲で駅舎が被害を受け、再



池袋駅前停留場 1962年撮影 高木進一氏提供

建されたあとも、地下鉄の接続や東西に百貨店が建設されるなど、周辺の発展も相まって、池袋駅は世界有数のターミナル駅へと成長していくこととなります。

都電一七系統

都電一七系統は、「池袋駅前」〜「数寄屋橋」間を運行していた、池袋駅前を通常ダイヤで発着した唯一の系統です。「池袋駅前」停留場は、池袋駅東口前のグリーン大通り入り口付近に設置されていまし



池袋駅東口 1962年撮影 高木進一氏提供

た。「池袋駅前」を出発した一七系統は、「伝通院」、「後楽園」、「神保町」、「日本銀行前」などを経て、「数寄屋橋」へ向かいました。池袋駅に乗り入れていた他社の路線や停留場の場所などを考えると、非常に需要の高い系統であったことが想像できます。しかし、東京都市部における道路事情の悪化による輸送能力の低下と路線バス、地下鉄の整備などから、

都電の利用者は年々減少し、都電は東京都交通局の赤字事業となつてしまいました。一九六〇年代から各系統の整備が進み、一七系統も一九六八(昭和四三)年に「数寄屋橋」〜「文京区役所」区間が短縮され、その翌年に一七系統が廃止となり、

池袋駅前から都電は姿を消すことになりました。現在では、都営バスと東京メトロ有楽町線、丸の内線が一七系統の停留場があつた地域を走っています。

都営トロリーバス

都営トロリーバスは、一九五二(昭和二七)年五月に開業を迎え、一〇一系統から一〇四系統の四つの系統が運行していました。都電より設置のコストが低く、路線バスのように排気ガスを出さないことから、当時は都電の後継となり得る次世代の交通機関として注目されていました。バスと名前がついていますが、法律上の名称は『無軌条電車』といえます。四つある系統のうち、三つの系統が池袋駅前を始発とするトロリーバスにとつて、池袋は重要な地点でした。元々バスターミナルとしてすでに機能していた東口ターミナルを、トロリーバスを運用するために大きく作り変えました。第三章で展示している「池袋駅東口周辺ジオラマ」でも、トロリーバスが転回するためのループ線と呼ばれた架線設備を見ることが出来ます。一九五七(昭和三二)年の工事をもって、総距離約五〇キロの環状路線が完成しましたが、交通渋滞が続き、トロリーバスは都電と同様に輸送能力が著しく低下しました。一九六八(昭和四三)年までに都営トロリーバスはすべて廃止され、わずか一六年で歴史に幕を閉じました。(郷土 水吉雄人)

作品を見る 読む

23

小説から池袋モンパルナスを「見る読む」 ―『桜雨』坂東眞砂子

番外編



池袋モンパルナスを知るひとつの窓口として、絵画や彫刻などの実際の作品鑑賞だけでなく、毛色を変えて小説を選んでみるのはいかがでしょう。池袋モンパルナスを題材に書かれた小説は多くはありませんが、詩人の小熊秀雄をモデルにし、小熊の怒りを買ったと言われる堀田昇一の『自由ヶ丘パルテノン』（一九四八年）、たくさんの実在する人物が名を連ねる伝記的小説として宇佐美承の『池袋モンパルナス』（一九九〇年）などがあり、後者は特に池袋モンパルナスファンには愛読されているようです。今回は現在も一般流通しており入手しやすい、坂東眞砂子（一九五八―二〇一四 高知県生まれ）の『桜雨』（一九九五年 集英社）をご紹介します。この作品は一九九五年に四六判発刊の後に一九九八年に文庫化となりました。恋愛小説を対象と

した日本の文学賞である、島清恋愛文学賞の一九九六年受賞作品です。坂東は同年には『山姥』で第一一六回直木賞を受賞しており、『桜雨』は作家にとつて乗りに乗った時期の一作と言えるでしょう。物語は、三〇歳の額田彩子と、七〇歳の五木田早夜の二人の女性を中心に進みます。始まりは、同棲していた男と別れた彩子が、西巢鴨の住宅街にある古いアパートの平和荘の二階へひとり越してくる場面です。既に平和荘の一階には早夜と同じ年の小野美砂江と一緒に住んでいます。彩子と早夜の日常は個々に過ぎてゆきます。

かつて女子美術専門学校西洋画科（現：女子美術大学）に通うために長岡から上京し、都会生活を謳歌した早夜が若かりし頃の恋愛を思い出しながら西巢鴨で肅々と日々を送る一方で、雑司が谷霊園のすぐ脇にあり、「三階のビルの窓からは、灰色の土筆のように突きでている墓碑群が見下ろせる。」*薫陶社という小さな出版社の編集部に勤める彩子は、『戦前幻想絵画読本』なる本の企画を進めています。「古賀春江や東郷青児、鬚光、古沢岩美、福沢一郎ら」*のように戦前

の日本で描かれた幻想絵画の情報収集に難航していた矢先に、知り合いのつてで幻想的な日本画に出会います。描かれているのは桜が舞い散る中にある窓の特徴的な家や恐ろしい表情の女性。作者すらよくわかりません。妙にこの日本画に惹かれ、なんとか本に掲載しようと考えた彩子は、調べるうちに「池袋モンパルナス」の存在を知り、また作品が生まれた秘密に近づいていきます。

『桜雨』の中でセリフを持つ登場人物は（おそらく）架空の人物であり、男女の愛憎劇が主題のフィクションではありませんが、池袋モンパルナスの史実を中心にした、大塚駅前のにぎわい、アトリエ村など戦前から戦中の豊島区の様子や、藤田嗣治ら当時実在した画家の名前、二科、帝展といった日本美術の画壇の潮流、また作品執筆時の一九九〇年代後半の池袋の街の描写が演出として随所に盛り込まれています。テーマごとに該当箇所を拾っていくのも、地理や歴史を知る人には変わった楽しみとなるでしょう。豊島区を舞台にする作中には、実在の地名やスポットが多く出てきます。とげぬき地蔵で有名な巢鴨の高岩寺や大塚の天祖神社をはじめとした寺社、雑司が谷や染井霊園、彩子と早夜の住まいのある西巢鴨の折戸通り、巢鴨新田、椎名町の駅、な

どなど、読了後に地図を片手にロケ地巡りをしてみるのも面白いかもしれません。実は、彩子が画家と作品の調査をするなかで、豊島区立郷土資料館も登場しています。

筆者は、彩子と早夜それぞれの過去の回想と現在が折りたたまれながら、結末に向かうにつれ増していく疾走感に小気味良い読了となりましたが、他に読まれた方はいかがでしたでしょうか。本稿ではネタバレしないように紹介するのも難儀でした。機会があれば感想を共有してみたいものです。



彩子と早夜、美砂江が利用する折戸通りと巢鴨地蔵通商店街は庚申塚交差点が起点となっています。（撮影二〇一三年二月二十五日、筆者）

*『桜雨』より引用

（美術 堀口 麗）

怪虫「大黒虫」の正体を追う〈後編〉



前編（一四四号）で挙げた共通の特徴

から考えると、この虫はトビケラの一
種であろうと思われる。トビケラは川
辺などに生息する虫で、成虫は翅はばに細
い毛が生えた蛾がのような見た目です。そ
の幼虫はカゲロウやカワゲラの幼虫と並
ぶ代表的な水生昆虫で、体長は1cmに満
たないものから、7cmほどになるもの
もいます（図4）。トビケラの多くの種
は、幼虫が口から吐き出す糸で水中に
ある植物の破片・木片・砂などの素材
をつづりあわせ、ミノムシのように
巣をつくりま

す。巣の素材や形状は種ごとに様々
で、餌を取るための網を張るもの（ヒ
ゲナガカワトビケラ科など）、巣を担
いで移動するもの（ニンギョウトビ
ケラ科など）、巣をつくらず歩きま
わるもの（ナガレトビケラ科）もい
ます。



図4 トビケラの幼虫（体長3cmほど）[2023年1月9日飯能河原にて撮影]

ヒゲナガカワトビケラの幼虫は、川
の釣り人にはクロカワムシの名で釣
り餌として知られています。また長野
県の天竜川で冬に採取され、ザザム
シといつて食用に流通しているのは、
現在はヒゲナガカワトビケラの幼虫
が主体です。

ニンギョウトビケラの幼虫は1cm前後
の大きさで、小砂粒を円筒形にまと
い、その両サイドにはやや大型の石
を三対ほどつけた巣をつくりま
す（図5）。蛹むすになるときはさらに上
下へもう一つずつ石をつけま
す。この姿がエビスや大黒の像を
想起させたようです。山口県岩国市
の錦帯橋付近では江戸時代後期に
「人形石」と呼んで土産あるいは郷
土玩具としており、ニンギョウトビ
ケラという和名もこれに由来しま
す。

ニンギョウトビケラの仲間の幼虫は、

大きな湖の沿岸に生息する種もい
ます。が、溪流や細流に生息する種
がほとんどです。ニンギョウトビケ
ラのように砂や石で巣をつくる場合
、巣への水の流入が妨げられてしま
うために、砂利採取によって細泥が
流出している川など、にごった水を
嫌います。この点では、水が

きれいなところを好む虫の名所として
知られた面影橋近くの高田總鎮守氷
川神社や、水が湧いていたという上
高田氷川神社は、ニンギョウトビケ
ラが生息する環境条件に適している
ようです。



図5 ニンギョウトビケラの巣提供 [岩国石人形資料館]

ところで「雲根志うんこんし」では「石蠶せきさんに当誤り也」として「夷大黒砂えいだいこくさ」とは区別して
いますが、「石蠶」は大黒虫の別名であ
つたようで、平賀源内が著した博物学書
『物類品隲ぶつるひんじゆ』（二七六三）には虫部「石蠶」
の項に「和名ダイコクムシ」とありま
す。本草家小野蘭山の『本草綱目啓蒙ほんそうかうもく』（一八〇三）には「イサゴムシ」などの異名
や地方名を紹介しながら「流水中石上
ノ蟲ナリ」「漁人取テ釣餌トス」「一
種細砂ヲ綴リテ小窠ヲナシ上ノ左右
二粗砂各一塊ヲ綴リテ米包ヲ並ブル
ガ如シ頭ニ小砂一塊ヲ戴キテ石ニ
附其形世祀ルトコロノ大黒天ノ形ノ
如シコレヲ大黒ムシト呼」「諸
国清流ニハ皆アリ」としています。な
お、

この類の虫について、「以上皆石蠶類ナ
リ」といい、石部にある「石蠶せきさん」（蚕
や芋虫のような形をした石）は「同名異
物也」とのことです。

前編の図1がトビケラの幼虫がつく
った巣であったとして、図2・3は何
でしようか。図2はトビケラの幼虫
よりもカワゲラやカゲロウの幼虫に
よく似ています。同じ場所で見えた
ため、同じ生物と判断したのかもしれ
ません。図3は水中にいるというの
に、左右両側の中肢と後肢の間に未
熟な翅のようなものが描かれています。
トビケラは完全変態と呼ばれる生活
サイクルを持ち、蛹の段階を経て羽
化します。大黒虫の正体を考察し
てみましたが、不明な点が残ってい
ます。手がかりがあればお寄せくだ
さい。

■参考文献・ウェブサイト

- * 岩国石人形資料館ホームページ
- * 岡村一郎、一九六六、「えびす虫と大黒虫」、『続川越歴史随筆』、川越史料刊行会
- * 丸山博紀・高井幹夫、二〇一六、「原色川虫図鑑（幼虫編）」、全国農村教育協会
- * 丸山博紀・花田聡子、二〇一六、「原色川虫図鑑（成虫編）」、全国農村教育協会
- * 森下郁子、一九七八、「生物からみた日本の河川」、山海堂

（郷土 鄧君龍）

区制90周年特別展 豊島大博覧会 「第2章 戦中・戦後の区民の暮らし」 展示紹介 後編

前号に引き続き、区制九〇周年特別展「第二章 戦中・戦後の区民の暮らし」の展示から資料を抜粋してご紹介いたします。前編は一四四号をご覧ください。

焼け跡からの出発

第二次世界大戦終結後、空襲により区全体の七割が焼失した豊島区は少しずつ復興への道を歩み始めます。

「焼け跡からの出発」の展示では、配給切符、陶製で作られた代用品を展示しています。戦時中、国による物資の統制により、人々は自由に買い物をする事が許されず、終戦後もしばらくの間は配給を利用せざるを得ませんでした。



①衣料切符早見表(清水富士夫氏寄贈)

食料品だけでなく、衣服も統制の対象とされ、一人につき一〇〇点分(一年分)の衣料切符が配られるようになります。

品物ごとに点数が決まっており、その代金と必要枚数の切符を引き換えることで、購入が可能でした。

写真①は三越百貨店が作成したチラシで、一目で必要な切符の点数が分かるようになっていました。



池袋ヤミ市

「池袋ヤミ市」の展示では、池袋駅東口にあったヤミ市の一部を模型で再現しています(写真②)。露店以外にも、大きな広告板を体の前後に挟んだ「サンドイッチマン」や炭を燃やしたガスを動力源にしていた「木炭バス」など、当時の世相を反映したのも見受けられます。

豊島区では一九四六(昭和二一)年、池袋駅東口に連鎖商店街「森田組東口マーケット」が開設し、最盛期には一三ものマーケットが形成されました。

池袋駅周辺のヤミ市は東京都による戦後復興の区画整理事業の対象となり、一九六二(昭和三七)年、池袋駅西口の森田組西口マーケット立ち退きを最後にヤミ市の姿はなくなりました。戦後のヤ



②池袋駅東口のヤミ市を再現した模型

ミ市の発達は、その後の豊島区発展の原動力となりました。

ここまで「第二章 戦中・戦後の暮らし」の展示をご紹介いたしました。第二次世界大戦終結後も世界では局地的な戦争が度々起こっており、現在もロシアによるウクライナ侵攻が国際問題となっています。

戦争を経験した世代が減少していくなか、展示を通してその記憶を後世に伝えていくことが戦争を取り扱う博物館の使命であると考えています。

(郷土 清水健太)

特別展「豊島大博覧会」 会期延長のお知らせ

5月28日(日)まで開催中!
開館時間: 午前9時~午後6時
休館日: 月曜日、第3日曜日、
3/21(火)、4/29(土)、
5/9(火)、5/10(水)、
5/11(木)



かたりべ
No.145

2023年3月24日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>

「かたりべ」一四五号をお届けします。前号に引き続き、今号も特別展「豊島大博覧会」の紹介記事が中心となりました。会場では、所蔵作品・資料を600点以上展示していますので、一度では全部見終わらない方が何度も足を運んでください。これから暖かい季節を迎えますので、皆様のご来館をお待ちしております。
(郷土 横山恵美)

編集後記

【参考】豊島区立郷土資料館「豊島区立郷土資料館」常設展図録「一九八四年、豊島区教育委員会/星野朗・松平誠「池袋『やみ市』の実態」第二次世界大戦後の戦災復興マーケット」立教大学社会学部研究紀要「応用社会学研究第二五集別刷」一九八四年、立教大学社会学部研究室